

289003

伊藤秀雄

幻影城

伊藤 秀雄（いとう ひでお）

1925年 川崎市溝ノ口に生まれる。

1949年 日本大学法文学部国文科卒。

著書 『黒岩涙香その小説のすべて』（桃源社・1971年）

『黒岩涙香伝』（国文社・1975年）

現住所 神奈川県川崎市高津区千年新町25-3

黒岩涙香研究
＜幻影城評論研究叢書＞

著者 伊藤秀雄
©1978 Hideo Ito

昭和53年10月1日
初版第1刷発行
定価1900円

発行者 島崎博
発行所 株式会社 幻影城
東京都千代田区神田神保町1-57
(〒101) 電話03(291)2391
印刷 東京ベル印刷・真生印刷
製本 星興社

0091—531005—2000

落丁・乱丁本はお取替します。

黒岩涙香研究／目次

涙香の魅力 6

幻の『西洋女大学』について 25

「法廷の美人」の発見 44

「無惨」について 48

『今日新聞』と『都新聞』の涙香小説について 55

「何者」について 75

新発見の「紳士の行ふ」をめぐって 80

「我不知」について 92

涙香小説拾遺 103

まぼろしの「春残香」 111

「幽霊塔」雑感 119

「仙術霞の衣」の原作 125

涙香のS・F 132

「今より三百年後の社会」について 140

涙香の小説書 155

萬朝報と人身攻撃 159

涙香の離婚と再婚 181

涙香の恋文 197

涙香の墓 205

涙香伝再説 210

涙香研究家・阿川参悠 223

附録

黒岩涙香年譜 231

黒岩涙香書誌 237

あとがき 315

装幀／池田拓

黒岩涙香研究

涙香の魅力

一

唯今、ご紹介に預りました伊藤でございます。夜分、おつかれの所、皆様お集り下さいまして有難うございます。私、人前で話すのはどうも苦手で、とつべんですので、おきき苦しい点はお許しの程お願いいたします。

演題は「涙香の魅力」と頂きましたが、諸先生を前にして話をするのは誠にさし出がましいことですが、伊藤はなんだか長い間、黒岩涙香についてやっていたようだが、それには、そこに何かよい所があったのだから、それを話せということでしょうと思えますので、その辺のところを思いつくままにお話いたします。

二

涙香の魅力と申しますと、人物もなかなか魅力がありますが、まず、その小説ではないかと思えます。小説といっても、涙香は西洋小説の翻訳家ですが、それが本職ではありません。彼は元来が新聞記

者でして、明治二十五年十一月に異色ある日刊紙『萬朝報』を創刊しますと、その論説欄によって、政治・社会を批評した論説を多く発表しました。そうした記者が本業であったのですが、非常に多趣味な人で、角力・撞球・囲碁が好きでそれらのパトロンでもありました。五目並べに定石を作って「聯珠」と称し、現代平仮名の百人一首を作らせ、カルタ競技を奨励し、どどいつを理論づけて「俚謡正調」というものを起したのも彼であります。国技館という名称も彼がつけたものだそうです。したがって西洋探偵小説の翻訳はそれ等多方面にわたる余技の一つであったのです。

さて、その小説の魅力を語るのには、その背景といいますが、すくなくとも涙香が小説を書くに至るまでの経緯を述べることがその魅力を語るのに必要なことかと思われますので、ざっと申述べますと、

三

涙香・黒岩周六は文久二年九月二十八日、従来二十九日とありますが、戸籍では二十八日で、これが正しいようです。高知県安芸郡川北村に黒岩塾の師匠、黒岩市郎の次男として生まれました。

このお父さんという人は数学が得意な人であったそうで、明治になってから大蔵省へ出仕して改暦・幣制などの事に關しまして意見を申し上げたことが多かったと言われております。黒岩家は学者の家柄ですが、遺伝もあつたのでしょうか。数学の得意な人が出ていたようで、涙香もそうです。晩年、高等数学の本をとりよせて、趣味で数学をやっていたらしく、涙香の兄、四方之進も得意であつたようです。まあ、頭がよかつたわけで、こんなところにも探偵物を翻案する素質があつたことを見出せるわけであります。

さて、生まれた時には兄が一人、姉が二人おりましたので、そうたくさんの子供はいらないというわけ、間引かれるところを市郎の弟で黒岩直方という人が当時子供がなかったので、そこへ養子として入籍しております。ですが、当分、川北村の生家で養育されたのであります。家が寺小屋ですから、塾生と一緒に学び、そこに大勢の弟子と一緒に寝泊りしたわけですが、涙香は大変勉強家であつたらしく、皆が寝る時はまだ起きており、皆が起きる時にはもう起きて勉強していたという事です。父も仲々厳格な人であつたらしく勉強をしこんでいたようですが、当人もその出生の関係もあつて意固地で、人に負けるのが嫌いで一生懸命勉強したようです。

涙香は若い時から探偵趣味、いいかえれば真理探求心が旺盛であつたようであります。明治十年十六歳の時と伝わっておりますが、この頃はお父さんは上京して死亡しておりましたので、高知の方の塾へ入っていたわけですが、夏休みで帰省していた時のこと、友人と共に隣村伊尾木村にある洞穴の探険に行つております。

それはかなり深い穴で、ジメジメしていて昼尚暗く、大こうもりなんかいて、甚だ気味の悪いところでした。そこに三つの淵がありました。皆で奥へ入つて行つて人跡の判らない奥所まで突き止めて皆の集まつたのは二の淵でありました。その淵には蛇の巣があり、深さが底知れぬといつて恐れられていました。恐れて竿さえ入れる者がいないので、涙香は「おれが調べてみる」と平氣な顔で着物をぬいで飛び込み、その最も奥の方の水が紫を呈している辺りへ泳いで行きまして、水中に潜り込むと、しばらくして苔の生えた大石を抱えて浮び、「たいして深くないよ。お土産にこれを持って来た」と言つて上つて来ました。そんなわけで、それ迄誰も知らなかった蛇ヶ淵の秘密は涙香少年のために明るみに出て

村人の度胆をぬいたということです。

四

明治十一年、養父、直方が大坂の上等裁判所の検事として奉職していましたので、上坂し、大坂法円坂町の大坂英語学校に入学したわけです。この学校は四年課程の学校で、旧第三高等学校の前身であります。

当時、彼は青雲の志を抱いて上坂したわけでありますから、政治家になるつもりでもあったようで、毎週校内で開かれる演説会においても年長者を驚かす程の名演説をやったらしく、英語も英人、カロザウスの家に寄寓して勉強したとも伝わっております。

が、この少年一寸変わったところがありまして、勉強ばかりやっていたのではなく暇を見つけては近くを旅行していたようで、若い時から涙香は大変旅行好きであったわけです。

そのうちに、養父の妾に子供ができますと、折り合いが悪くなって、ぐれ出し、放蕩でもはじめたらしく、勘当されましたが、姉、為子が銀座で医師をやっていた秦吞舟にとついでおりましたので、明治十二年の夏に家出してそこへ行きました。この頃もさかんに勉強していたようでして、英語の勉強に原書などずい分読んだらしく、その中に探偵小説も入っていたわけです。逆境にある者が夢にაცოგれるのと同様、涙香は探偵小説の秘密の世界に沈潜したのでありました。

はじめ駿河台の成立学舎というのに入りましたが、のち明治十四年慶応義塾に席を置きました。医者
の義兄はよい暮しをしていたそうで、学費がもらえたらしく、本を買って自由に勉強できたので、学校

に通うのがもどかしく両方共卒業していません。

この頃、英書の翻訳もして出版しています。『雄弁美辞法』とか『政体各論』『格物政理学』などという本です。政談演説も盛んにやっていたのですが、政治家になろうという考えは、なにしろ年が若いし、頭が上らないというわけで、中止して、一番、学問の方で身を立てようという気になっていたようです。

はじめは彼が学んでいた成立学舎発行の『東京輿論新誌』の編集員となって論文「生糸紛議の結末如何」も発表していましたが、その頃（明治十五年）今のロッキード事件のようなのが起ったのです。北海道開拓使の官有物払下げ問題というやつで、一千四百万円を注ぎ込んだ官有財産を、開拓使長官の黒田清隆がわずか三十八万円、無利息三十年賦で、同じ薩摩出身の政商、五代友厚と長州出身の中野梧一の兩人に払下げようとしたことが、暴露して新聞や演説会で総攻撃を受けました。結局、政府は安値払下げを中止させたわけですが、涙香は「開拓使官吏ノ処分論ズ」という痛烈な攻撃文を明治十五年一月二十八日の同誌にのせたため、官吏侮辱罪に問われまして、十六日間、横浜戸部の監獄に収監され、外役として野毛切通しの開鑿かざく工事に使役され、もっこをかつき、土運びをしました。背中せなかの皮がむけるといったひどいものだったらしく、そのつらさは勿論、裁判の不合理は涙香の生涯、忘れられない思い出となったのであります。

その後、『同盟改進黨新聞』という堅い新聞の主筆になりましたが、これは資本がないのですぐつぶれ、次は明治十八年、『日本たいむず』という新聞の同じく主筆になりましたが、これも彼の気付かぬような些細な記事が当局の忌諱に触れて、四十日ほど発行停止に逢ったために、社員職工の給料はもとより

紙代さえ払えぬ始末となつて廃刊になってしまいました。

五

さて、この頃、涙香は新聞記者の修業だという考えで、物事に広く通ずる必要を考えまして、寄席や遊廓に出入りするのがよいと、家には吉原花魁という表札を出して吉原などに遊んでいたようで、その他、書画、骨董、茶道、花道、棋道、香道、邦楽、演舞とあらゆる事をやっていたようです。

その新聞での友達に曾我部一紅という男がおりました。彼は『同盟改進黨新聞』の時から仲間として、『日本たいむす』へ涙香を紹介した人ですが、彼の父親は岐阜県の代議士でして、上京してくるとその定宿にしていたのが麴町にある上野屋という旅館でした。そこへ一時やっかいになろうというわけで、上野屋へ涙香を連れて行ったのですが、そこはつぶれてしまっていて、やっと尋ねあてた家は京橋の鍛冶町にある小さな家で、上野屋の女主人は娘ののぶと二人暮しで長唄の師匠をやっていました。彼女は弁護士の子でしたが、まだ四十前で、二人は花がゐるたか何からよい仲となるわけです。

涙香はほどなく『絵入自由新聞』にはじめ探訪員として就職しすぐ主筆になりましたが、月給僅か十円で、本はたくさん買うし、根が金に淡泊の方なので、なかなか苦しく、女主人、鈴木ますといいますが、その夫人の援助を受けるようになったわけです。

この頃だと思えます。明治十九年十月二十四日、あの有名なノルマントン号事件というのが起りました。英国の汽船、ノルマントン号が、横浜を出帆して神戸へ向う途中、二十四日の夜、紀州沖で暗礁に乗り上げて沈没し、乗客の日本人二十五名全員水死しましたが、船長ドレーク以下船員はボートで脱出

して無事だったということで、国民は激昂し、神戸で裁判が行われたわけですが、涙香は新聞記者として特派され、詳細な記事を新聞社へ報告しております。

当時は鉄道が全通していませんで、神戸の方へ行く日本人は船を利用していたわけです。公判は横浜で開かれましたが、この時も涙香は傍聴しております。日本側は英語ができないので、通訳が滅茶苦茶だったのを、涙香が聞いて、あの通訳は間違っている、ああいうことを裁判でやられてはかなわないと言って新聞に書いたりしていますが、これが涙香が周囲に名を知られた最初だという人もおります。

さて、今まで語ってまいりましたことからお分りのように、洞穴の探険、外人に接して語学を学んだ経験、家出の経験、獄中生活の経験、不倫な関係の経験、裁判の経験、等々と、探偵小説の内容にあるような経験をしている事は、彼がその後、西洋小説を翻訳する上での非常な強みになったものと考えられます。単に翻訳ならさして、人生経験は必要ではなかったでしょうが、涙香の場合、原書は自宅へ置いてきて、新聞社では原書を見ないで訳していたのですから、色々な経験がなければ翻案しにくかったのではないのでしょうか。

ともかくこの頃は、いつまでもますのやっかいになる事は嫌だったに違いなく、一つ小説を訳して新聞に発表したら、すこしは生活の足しになるだろうと考えまして、友人の曾我部に話しますと、よからうというわけで、彼の勤めていた『今日新聞』に発表したのが、明治二十一年一月発表の「法廷の美人」でありました。

その前に「二葉草」というのを口授して知人の小説家、彩霞園柳香に翻案させましたが、これは不評で中止してしまっただけきさつもあったので、自分で書く気になったのです。それに当時の新聞は戯作と

いいまして、面白くもおかしくもない旧態依然たるものでしたので、西洋には、このようなものがあるという事を知らせたかったからでもあったようであります。

六

次に、自分の経験談をお話いたします。涙香の本との出会いから語る順序となりましたので、それからお話します。あれは、たしか中学二、三年昭和十四、五年の頃であったかと思いますが、春陽堂文庫の本で「死美人」というのを読んだのです。今は春陽文庫といいますが、あれの前身で、兄貴が何処から買って来たものですが、文語文の探偵小説でして、会話は口語ですが、その古風な一種なんとも言えない味が子供心にもすっかり気に入ってしまいました。

それまでに『少年倶楽部』で江戸川乱歩の怪人二十面相ものや、高垣眸のもの（「まぼろし城」）、大佛次郎のもの（「山獄党奇談」）など、よいと思って読んでいたのですが、それよりも涙香が気に入りました。この文語の味のよさですが、他の作家でも文語で書いたものがあります。例えば鷗外・樋口一葉・尾崎紅葉とか涙香と同じ筆法で訳している丸亭素人とか南陽外史・菊亭笑庸・井上笠園なんて人のもあるのですが、どうも涙香ほど面白くない。やはり体質の問題になりましょうか。

音楽などもそうですね。私、モーツアルトが好きですが、モーツアルト風なところのあるハイドンは似ている点はあるても、やはりちがいますし、その他ベートーヴェン、シューベルトなどにまねしたものがあります、やはりちがいます。こうした人に真似のできないよさ、つまり個性が特に文語のものにはあるわけで、明治三十二年の「幽霊塔」から現代文になりますが、やはり、それより前のものがよい

ようです。文語の探偵小説といった魅力があるわけです。

文語だからよみにくいと言う人がいますが、これは食わず嫌いというものだと思います。今の若い人達にも結構よめるのです。戦前は涙香位よまれた作家はまれで、小僧さんや女子供も読んでおり、扶桑堂・明文館・大川屋といろんな本屋から単行本で重版されて出ていました。それが戦後はあまりよまれないというのは、衝に当る人が本を持っていなかったからではないかと思います。それだから宣伝しませんでした。ですが、今度、探偵小説専門誌の『幻影城』の別冊で涙香特集をやります。

十一月二十八日発売の新春号ですが、「幽霊塔」など出ます。この特集も私を持っていましたので編集者の方が相談にこられて出すわけです。探偵小説をやるのには、一番の元祖で大物である涙香からはじめなければならぬわけですが、今迄は江戸川乱歩あたりからはじめており、不思議なことに、なおざりにされていたのですが、だんだん見直されてくれればよいが思っております。

さて、その文語の探偵小説ですが、地の文は短くすぐ会話になってしましますが、もっと地の文が長ければよいと私など思ったものです。例えば浪花節ですね。あれは人によって色々好ましい節がありましてよい調子のもので音楽をきいているようですが、どうも会話のところがおちるようでして、私など会話などもっとうんとすくなくして節のところを長くやって貰いたいと思っているほどでございます。

そんなわけで大学に入った終戦後からは涙香のものを集める気になったわけです。それから涙香の作はよんで見てわかるのですが、駄作というのがありません。いや低調な作はないわけではありませんが、ほとんどが面白く、筋がはっきりしているのです。それは原書の選択のよさということになります。が、明治二十一年の訳しはじめの頃に既に原書を三千部以上読んでいました。その中から選んだのです。